

The Whisper from Amherst

～エミリオのささやき～

金ヶ崎町立図書館内のアマースト町コーナーで、「眩しい悲劇 光、風、水」という1冊の詩集を見つけました。ウィリアム・ブレイク、マザー・グースの歌、ウィリアム・シェイクスピア、ウィリアム・ワーズワース、そしてエミリオ・ディキンソン等、英米の著名な詩人の作品やわらべ歌、しかも光と風と水をテーマに詠まれた詩を集めた詩集です。そして、それら37篇の詩はバルセロナのサン・ホルヘ美術大学で学び、帰国後もスペイン各都市、ジュネーブなどで作品を発表している落合皎児氏の美しい版画の挿絵で彩られています。

エミリオの詩は題名ないのが1つの特徴ですが、和訳されてこの詩集に掲載されているエミリオの9つの詩には編者により、題名がつけられています。

次の詩は、「戦場」と名付けられた詩です。

ゼ イ ドウロプトウ ライク フレイクス 'They dropped like Flakes'

They dropped like Flakes

みんな 雪のように

ゼ イ ドウロプトウ ライク スターズ
They dropped like Stars

星のように

ライク ペタルズ フロム ア ユロウズ
Like Petals from a Rose

ばらの花びらのように 落ちた

ウエン サドゥンリー アクウロス ザ ジューン
When suddenly across the June

あの六月 ふいに 風の

ア ウインドゥ ウィズ フィンガーズ ゴウス
A wind with fingers – goes –

指がなぎはらった

ゼ イ ベウリシュトゥ イン ザ スィームレス グウラス
They perished in the Seamless Grass

蜜に茂った草のなかに みんな朽ちた

ノウ アイ クドウ ファインドゥ ザ プレイス
No eye could find the place –

誰の目も 場所を見つけだせない

バトゥ ゴーヅドウ キャン サーマン エヴリ フェイス
But God can summon every face

ただ 神さまだけ ひとりひとり顔を

オヴ ヒズ ウリピールレス リストゥ
Of his Repealless - List.

呼び出す 神の消しゴムを使わないノートに

(「眩しい悲劇 光、風、水」内藤里永子、吉田映子編訳)

19世紀のアメリカで起きた戦争といえば南北戦争(英語: American Civil War 1861~1865)です。エミリーの詩で制作時期のわかっている 1656 編のうち、852 編を書いたのがこの時期で、最も多くの作品を書いたこととなります。研究者のひとりDaniel Aaron^{ダニエル アーロン}は1973年に、南北戦争は国民すべてに強烈な感情を経験させ、ディキンソンはその感情のほとばしりを糧として、そこからもっとも激しい、切迫した苦悩に満ちた詩を創造した、という意見を述べており、多くの研究者たちはその意見を支持しています。エミリー自身も大切な友人や親戚を戦争で亡くしている国民のひとりです。

戦争について書かれた詩‘It feels a shame to be Alive-’^{イット フィールズ ア シェイム トゥ ビー アライヴ}(わたしは生きているのが恥ずかしく感じられます—J444)は、その戦争で亡くなったすべての人々に捧げられたものだといわれています。

また、‘My Triumph lasted till the Drums’^{マイ トウライアンフ ラステイドゥ テイル ザ ドラムズ}(わたしの勝利は鼓手たちが—J1227)は南北戦争についての感想であるばかりでなく、「エミリーと南北戦争の戦い」と「エミリーと宗教との戦い」とがいかに類似しているかを表現している、といわれている詩もあります。

1864年には、南北戦争の戦没者のため、ワシントンD.C.からポトマック川を渡ってすぐのヴァージニア州アーリントンに、アーリントン国立墓地が築られました。アメリカの連邦政府は5月の最終月曜日を、戦没将兵追悼記念日^{メモリアル デイ}‘Memorial Day’^{メモリアル デイ}と定めて祝日とし、墓石には星条旗が手向けられます。この祝日は、兵役中に亡くなった兵士を追悼する日ですが、最初は南北戦争で亡くなった北軍兵士を称えるために始められました。

Nellie's Mom



5月最終月曜日のアーリントン墓地



南北戦争において事実上の決戦となったゲティスバーグの戦い